

「民俗」と「芸能」

——いわゆる「民俗芸能」を記述する方法・序説——

橋本裕之

-
- | | |
|-------------|------------------------|
| 1 はじめに | 3 いわゆる「民俗芸能」を記述する方法・序説 |
| 2 「民俗」と「芸能」 | 4 おわりに |
-

論文要旨

本稿の目的は従来さまざまに考えられてきた「民俗」と「芸能」のかかわりをあらためて検討して、いわゆる「民俗芸能」を記述する方法にまつわる未発の可能性を模索するところにある。本稿ではこうした問題に対して一定の見解を提出するため、「民俗芸能」という術語の形式に留意しながらも、さしあたって民俗芸能研究が「民俗」と「芸能」のかかわりをどう理解してきたのか、その系譜を検討したい。

民俗芸術の会が発足した昭和2年(1927)以降、民俗芸能研究における主要な潮流は折口信夫に代表される民俗学的研究、および小寺融吉に代表される美学的研究であった。前者には「芸能」を「民俗」に規定されるものとして定位して、その信仰的制約を重視する偏向がみうけられる。また、後者に「民俗」と「芸能」のかかわりをきびしく検討する試みは僅少であり、いわゆる「民俗芸能」に美を発見するところに専心しがちであった。こうした研究史の付置連関はいわゆる「民俗芸能」が複合的な文化現象である消息をしめしているように思われるのである。

それでは、両者を統合する視座の可能性は存在するのだろうか。いわゆる「民俗芸能」の持つ本質的な性格を「民俗」と「芸能」の相互規定的な関係にもとめたばあい、とりわけ「芸能」が「民俗」から離脱する過程に注目して、「民俗」と「芸能」が接する特異な位相を主題化する試みは、いわゆる「民俗芸能」を記述するばあいにあってもきわめて有効である。

しかも、「芸能」に対する過剰な関心が「芸能」を「民俗」から離脱させる最大の契機たりうるのだとしたら、民俗芸能研究は「芸能」に対する過剰な関心を生み出す個の領域を記述する試みに着手しなければならない。こうした個の領域が「民俗」と「芸能」の相互規定的な関係を最もよく体现しているはずだからである。かくして、美的価値を過剰に突出させる、いわば「異常人物」を主題化する試みが浮かびあがってきた。